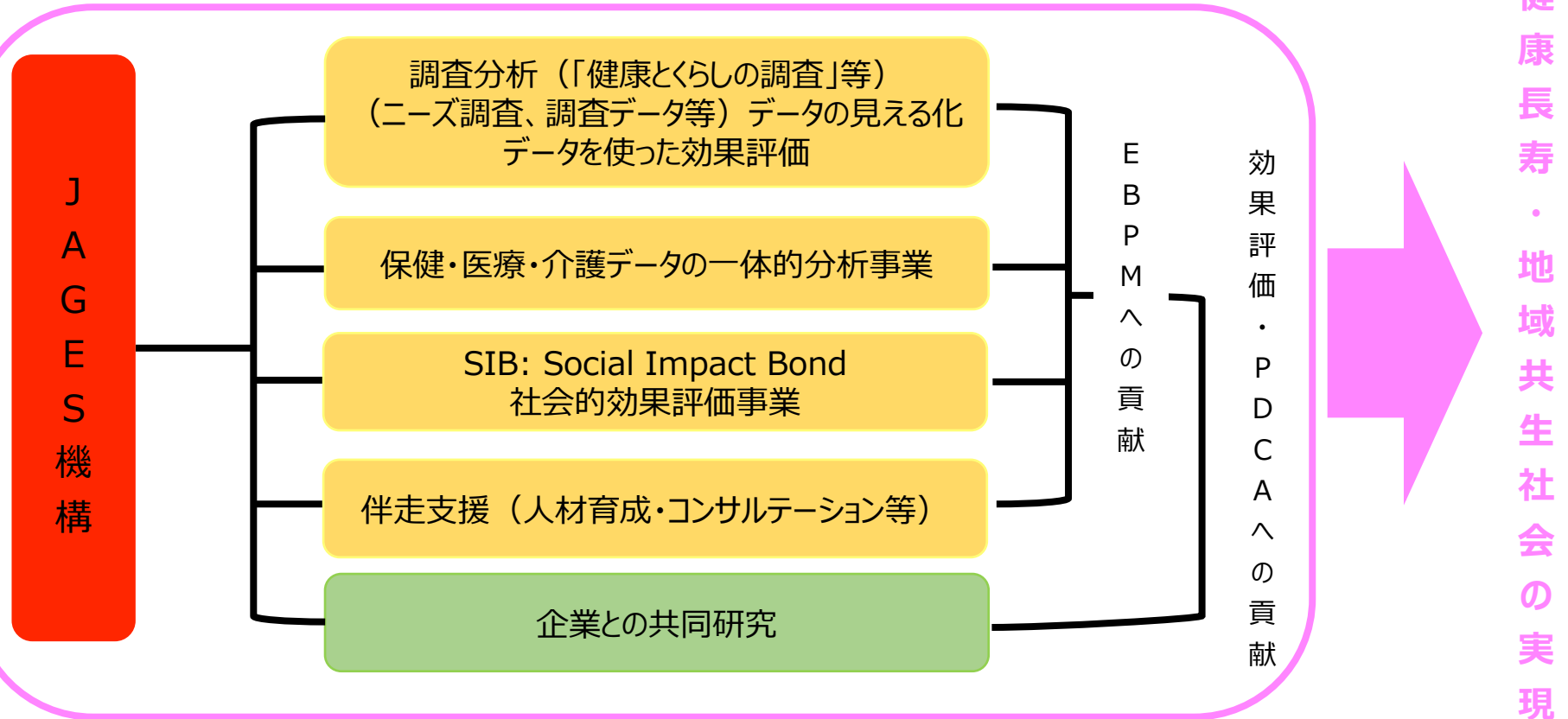

JAGES調査の活用

～EBPM・PDCAサイクルによる施策運営への活用～

伴走支援概要

調査結果の活用に向けた伴走支援

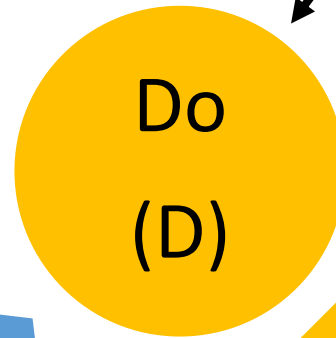
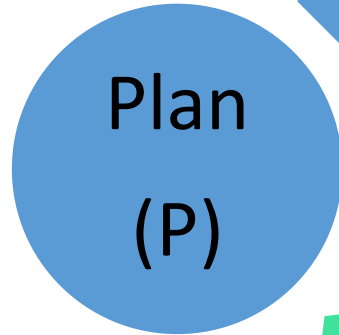
健康とくらしの調査結果を軸に、調査結果を活用したEBPM・PDCAサイクルによる介護予防事業の推進



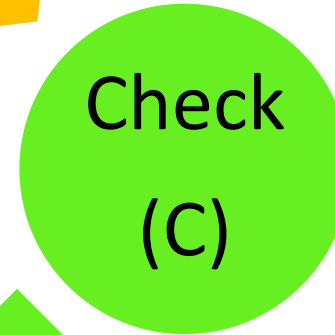
健康長寿・地域共生社会の実現

PDCAサイクルに基づく伴走支援

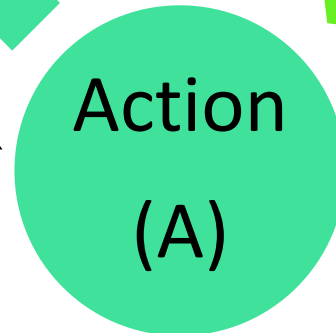
- 研修（地域診断書の読み解き、強み・課題把握、重点対象地域選定など）
- 調査結果に基づく介護予防施策検討
- ロジックモデル作成
- 住民主体の事業の立ち上げ
- 効果評価に向けた準備



- 介護予防事業へのエビデンスの実装支援
- 住民主体の事業実施支援
- 調査（データ収集）支援



- 調査結果、分析結果に基づく事業の修正、拡大
- 現在実施している事業の妥当性の検討
- 地域診断書の他部署での活用



- 調査の実施
- 調査データの深掘り分析
- 医療費・介護費分析
- 事業の効果評価

伴走支援例 Plan

研修会：地域診断書の読み解き方

タイトルの読み取り方

選択した指標の結果がほかの市町村（小地域）と比較して3分位の何番目に入っているか確認できる

- どの地域が良い／悪い？
- それらの地域は固まっている／分散している？
- 重点対象地域は？

JAGES2022 市町村間比較(自立者のみ) 地域診



カテゴリー/指標名を選択

⇒数値が大きい方が良い(リスクが低い)のか、悪い(リスクが高い)のかは指標によって異なる

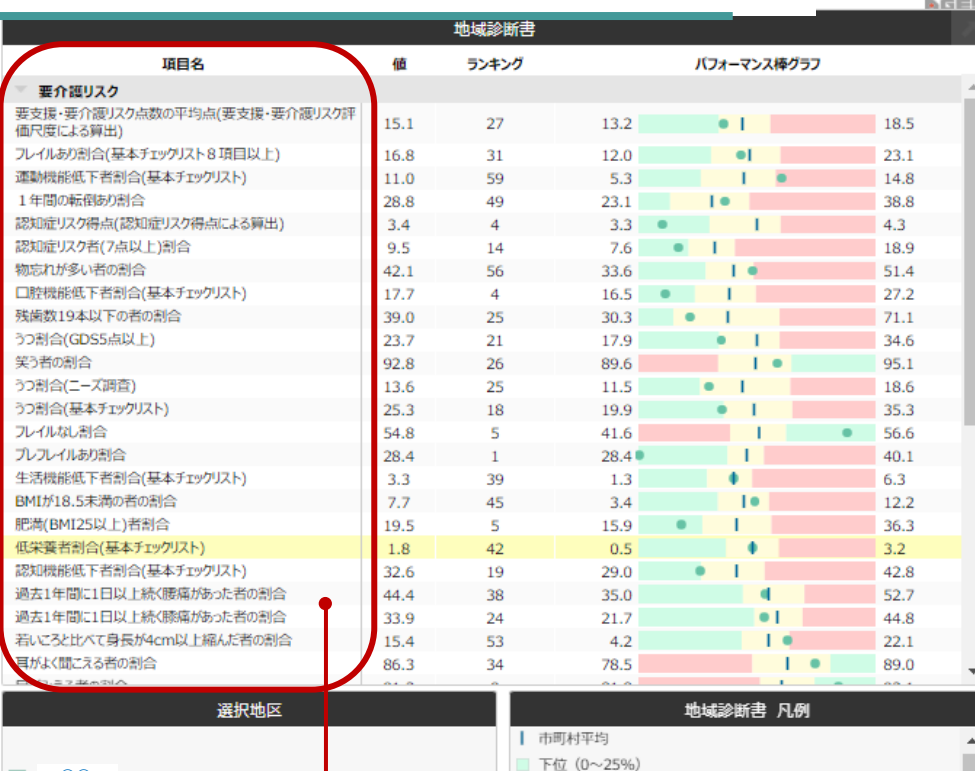
上四分位: 10.8
四分位範囲: 3.0
分散: 4.6
標準偏差: 2.1



今回の数値と過去の数値の推移

(他市町村との比較ではない)

- 目標値を達成しているか？
- 改善／悪化しているか？
- 設定した目標値の設定が妥当か？

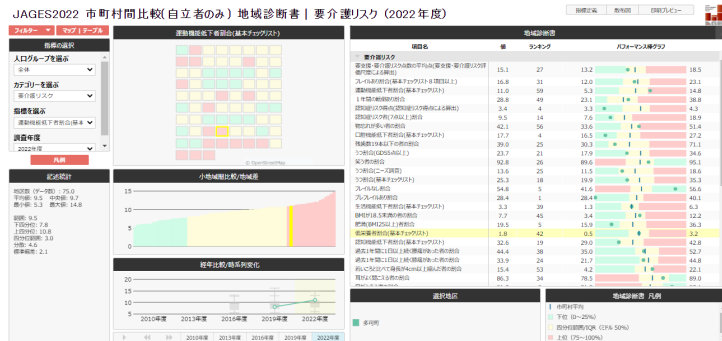


地域診断書の読み取り方

どの指標が良いか(悪いか)確認し、重点的に見ていく指標を確認する。

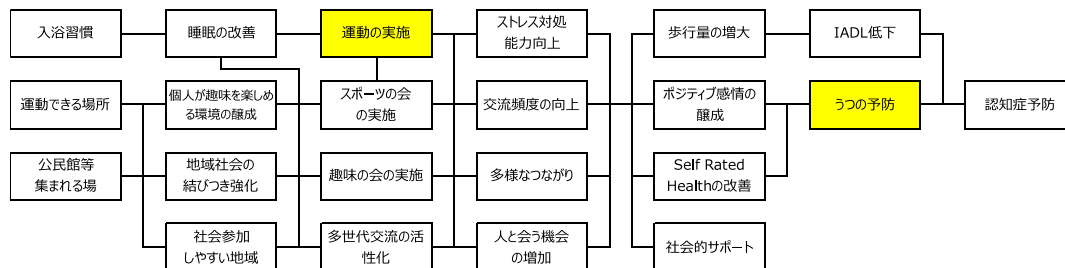
- 良い／悪い指標は？
- 現場感覚から妥当／意外？
- 他の指標との関連から妥当／意外？
- どの指標を施策対象にするか？

コンサルテーション：ロジックモデルの作成



関連部署の職員が集まり、強み・課題とその要因分析を実施

- データから明らかになった強み・課題指標を基に、**小地域間比較**や日々の業務などで得られた質的情報を加味して要因を分析。
- 要因分析を行う際、複数の部署が参加することで様々な経験、視点が持ち寄られ、多様な分析が可能に。



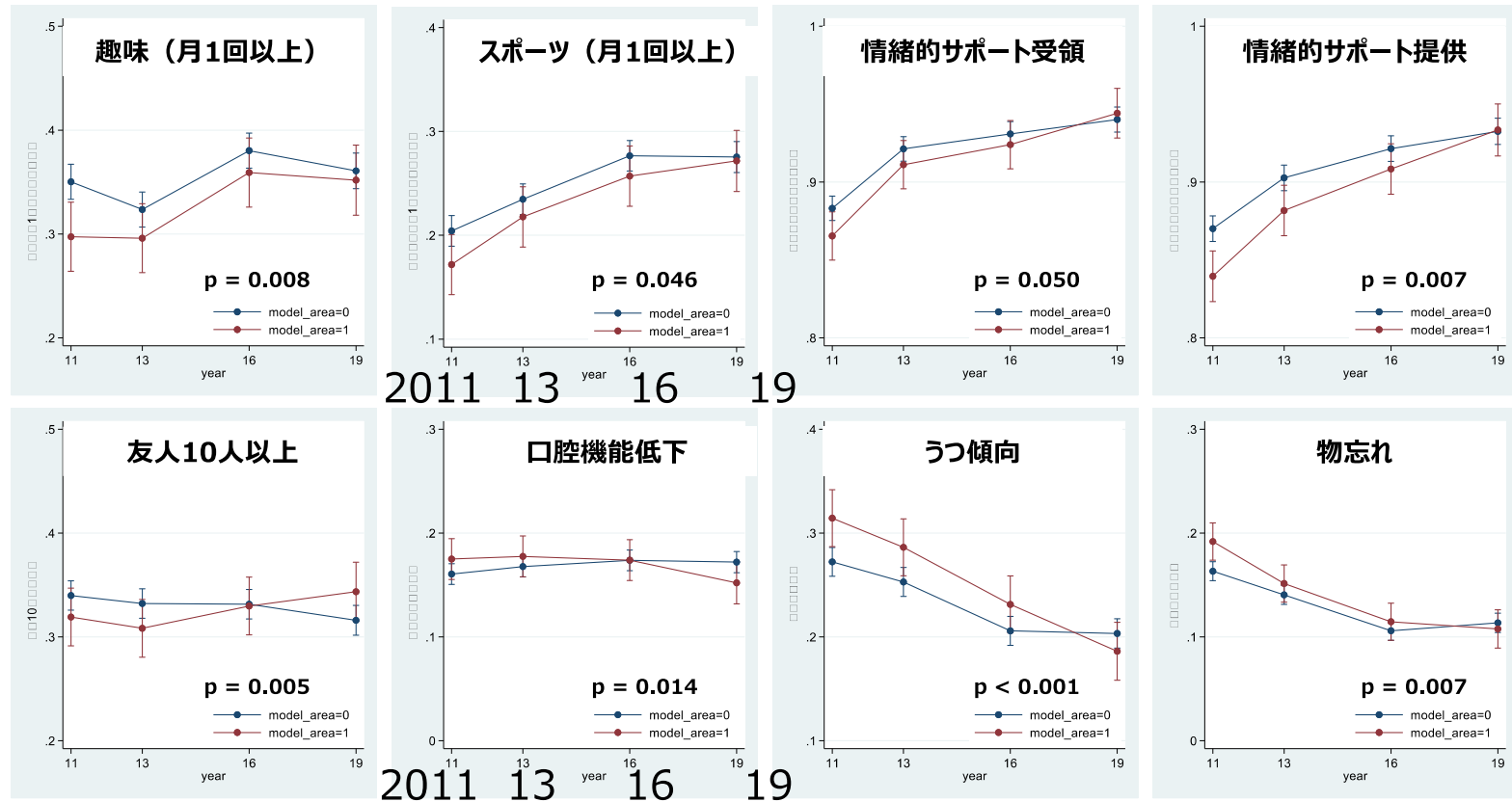
抽出された強み・課題とその要因を基にロジックモデルを作成

重点対象地域の選定～事業の実施～効果の評価

8年かけて社会参加が増え健康指標も改善

辻大士, 高木大資, 近藤尚己, 丸山佳子, 井手一茂, LINGLING, 王鶴群, 近藤克則: 通いの場づくりによる介護予防は地域間の健康格差を是正するか?: 8年間のエコロジカル研究. 日本公衆衛生雑誌 69 (5), 383-393, 2022. DOI <https://doi.org/10.11236/jph.21-120>

赤: モデル地区 (n = 16)
青: 非モデル地区 (n = 62)



非モデル地区に比べ、不良であったモデル地区で、社会参加や支え合い、友人は増え、うつや物忘れは減少

伴走支援例 Plan～Do

コンサルテーション：住民による地域活動づくり①



市職員が強み・課題指標の検討を実施

- 市職員が使ってみて、**地域住民主体の街づくりに活かせることを実感。**
- 地域住民への地域診断書の公開を決める。**
- それまで、パイロット地域を定めて地域づくりを行っていたので、その**パイロット地域の住民代表に地域診断書を公開。**

1年目

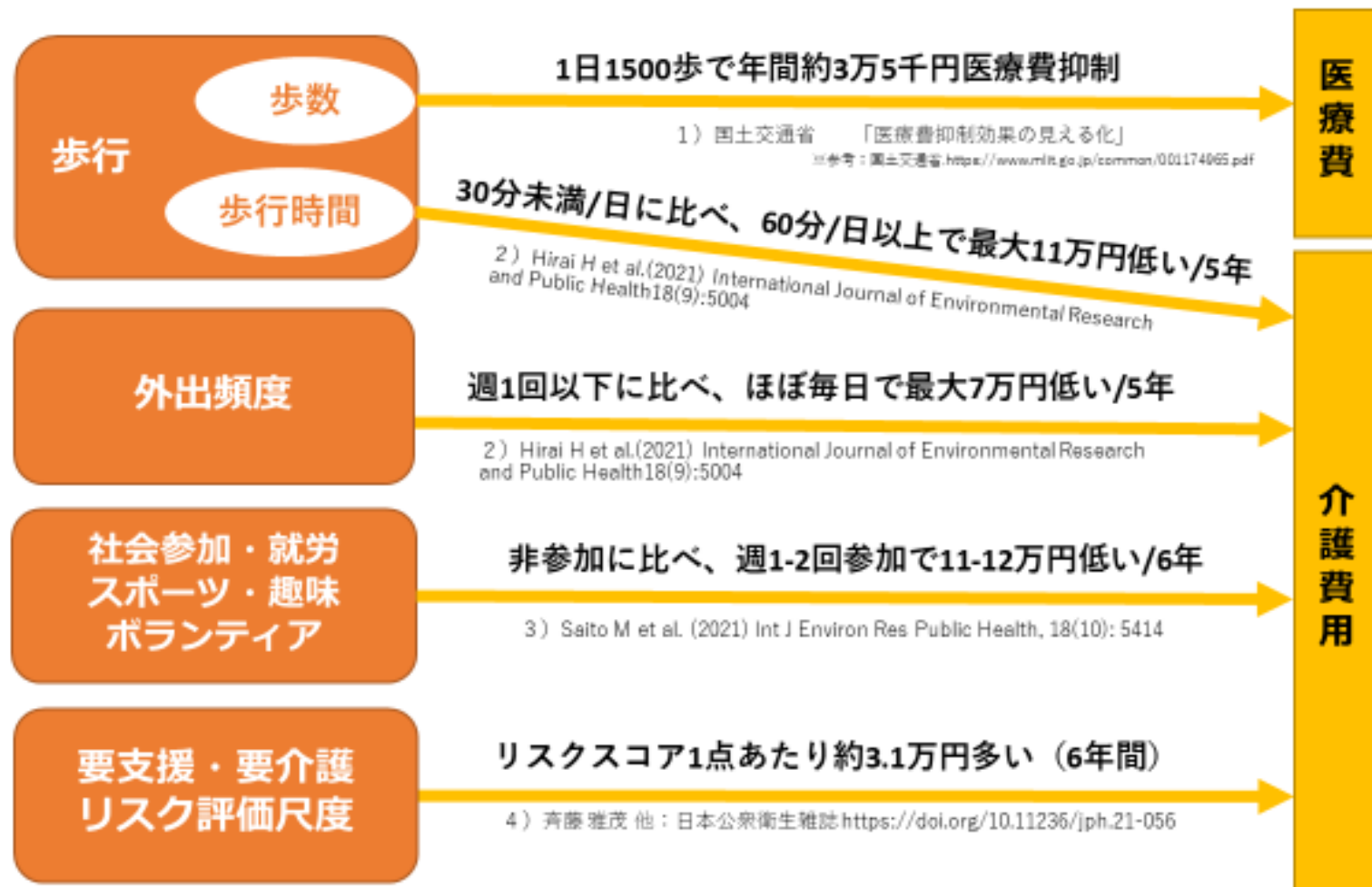
2~3年目

- 地域住民と地域包括職員で**地域診断書から「強み」「課題」を検討するワークショップを実施
- ワークショップの結果、「**独居・孤立**」が課題と認識され、「**独居・孤立**」を解消するための活動を考えていくことを決定。

- 地域住民と地域包括職員で「**独居・孤立**」解消活動立ち上げのワークショップを実施
- 短期、中期、長期の目標を定めた上で、短期に実施する活動を検討。**
- 地域の資源を生かした活動**を考える3つのグループができる。
- 1)地域住民が誇りを持つ桜を題材にして、高齢者だけでなく子どもや子育て世帯を巻き込んだ活動、2)地域の新しい農産物を活用した活動、3)ケアマネなどと連携して引きこもりがちな高齢者が講師になる活動などが提案（一部は実施）された。**

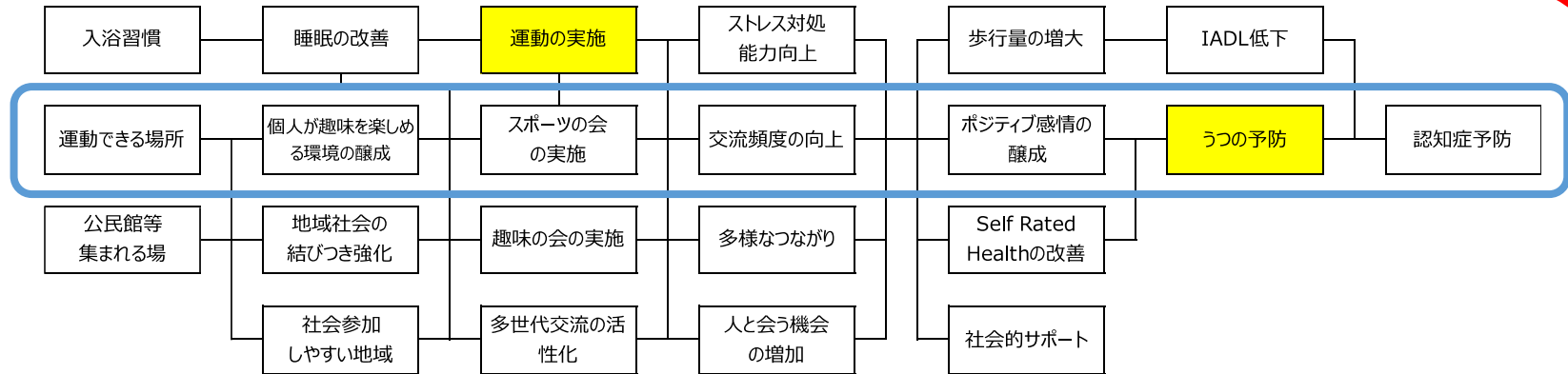
伴走支援例 Check

医療・介護費の予測要因



2021/9月版

コンサルテーション：ロジックモデルの活用～事業評価



体操教室を行っているので、本当に効果が出ているか分析したい

- ・ロジックモデルを基に「何を評価するか」を検討
- ・「何を評価するか」を決めたら、評価に必要なデータを検討



評価に必要なデータがないことが判明→今後のデータ収集の改善を検討

- ・現在あるデータでできる分析を検討
- ・エクセルのピボットテーブルを使って分析を行ってみる

事業成果例

- ・ 何のためにその事業を実施しているのか理解できた。**納得して事業を実施できる。**
- ・ 事業実施の目的が明確になったことで、**どのようなことに注意・注目して事業を実施する必要があるか明確になった。**
- ・ これまで漠然とデータをとっていたが、**どのようなデータを取る必要があるか理解できた。**

伴走支援例 Action

コンサルテーション：実施中の事業の妥当性評価

活動1

地域診断書をもとに、**市の強み・課題を抽出**

強み：

運動機能低下者割合が低い、スポーツの会参加者割合が高い、
IADL低下者割合が低い、

課題：

要支援・要介護リスク者得点平均点が高い、フレイルあり割合が
高い、社会的役割を持っている人の割合が低い、就労者割合が
低い、友人の人数が少ない、認知症リスク得点が高い、など。

活動2

No	活動・事業	成果・行動変容			
		第1段階 (アウトプット)	第2段階 (初期アウトカム)	第3段階 (中間アウトカム)	第4段階 (最終アウトカム)
1	体操教室	・参加者が増える ・外出の機会が増える ・他者の交流が増える	・身体機能の向上 ・筋力の向上 ・引きこもりが減る ・助け合いが増える	・行動範囲が広がる ・体操以外の交流が増える ・うつが減る ・口腔機能の維持・改善	・フレイルが減る ・介護認定を受けない人が増える ・介護給付費が減る ・医療費が減る
3	口腔衛生講座	・栄養と口腔の知識が身に付く ・自分の食生活や歯磨きの習慣を振り返る ・行政と企業の連携が行われる ・外出、歩く機会が増える ・他者との交流機会が増える	・低栄養の改善 ・口腔機能の維持 ・残歯数の維持	・筋肉量、活動量が上がる ・フレイルが予防できる ・感染症予防につながる ・他者との交流が増える	・介護認定のリスクが減る ・歯科医療費が減る ・認知症予防につながる
4	脳の健康講座	・自身の認知機能の状況を把握できる ・認知症予防の知識をつけることができる ・他者との交流機会が得られる ・外出、歩く機会になる	・認知症を予防しようと思う	・認知症予防活動を行う	・認知症が予防される

現在実施している事業について、地域診断書の指標を基に**短・中・長期的に期待される成果を検討**

抽出された強み・課題と実施中の事業の将来期待される成果を比較し、事業の妥当性を検討

- ・実施中の活動において、期待される成果などに重複はないか。重複がある場合、それは妥当か（対象者が違う、対象地域が違う、など重複して実施する理由があるか）。
- ・抽出された課題のうち、対応が必要な課題への対応は実施中の活動で全て網羅されているか。
- ・強みを伸ばしたり、課題を解決するために連携できる事業はないか。
- ・強みを伸ばしたり、課題を解決するために他部署や他部署の事業との連携は必要か。 など

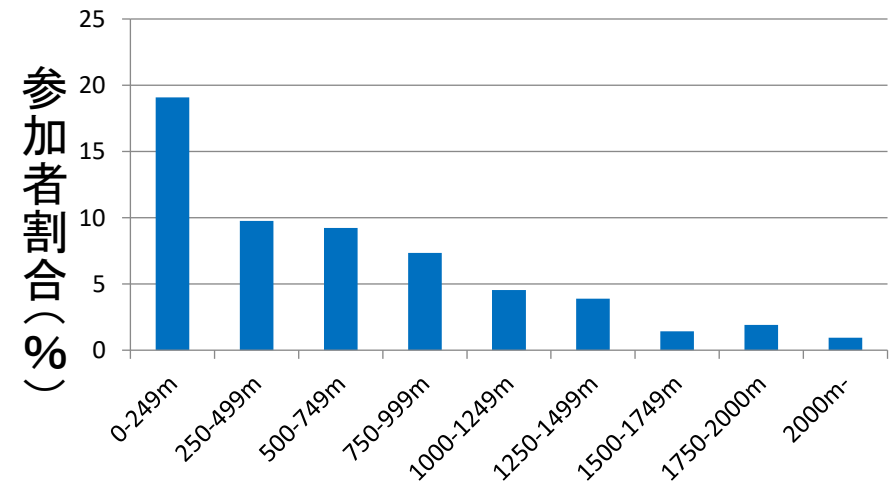
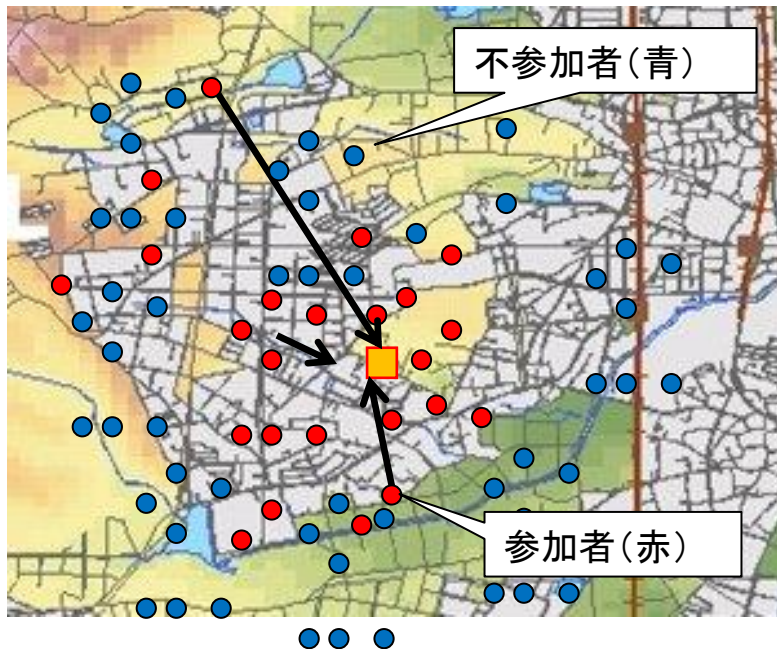
活動1、2の
成果を突合
して実施中
の事業の妥
当性を検討

近い人ほど参加している

地理情報システム（GIS）により計測した会場までの距離を測定

近くに住んでいる人ほど、主観的健康感は改善

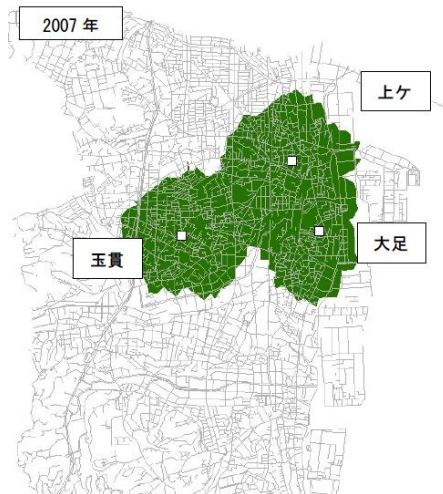
Ichida, et al SSM
2013



近い←会場までの距離→遠い

サロンからの道路距離1km圏の推移

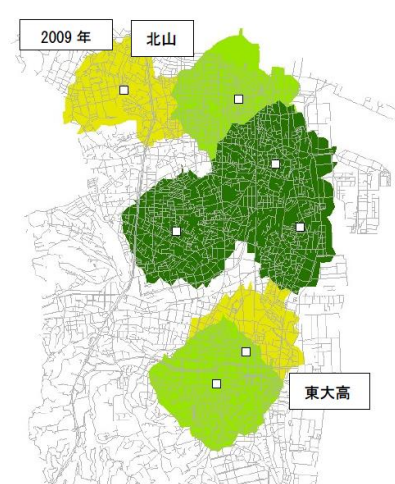
2007



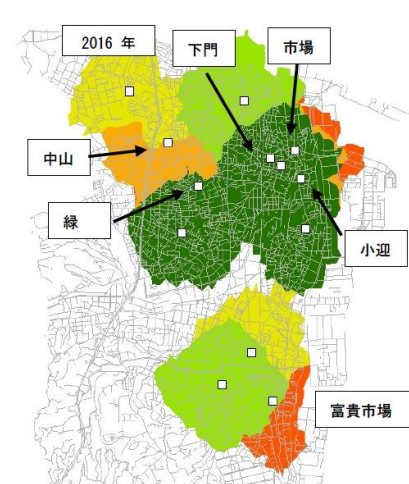
2008



2009



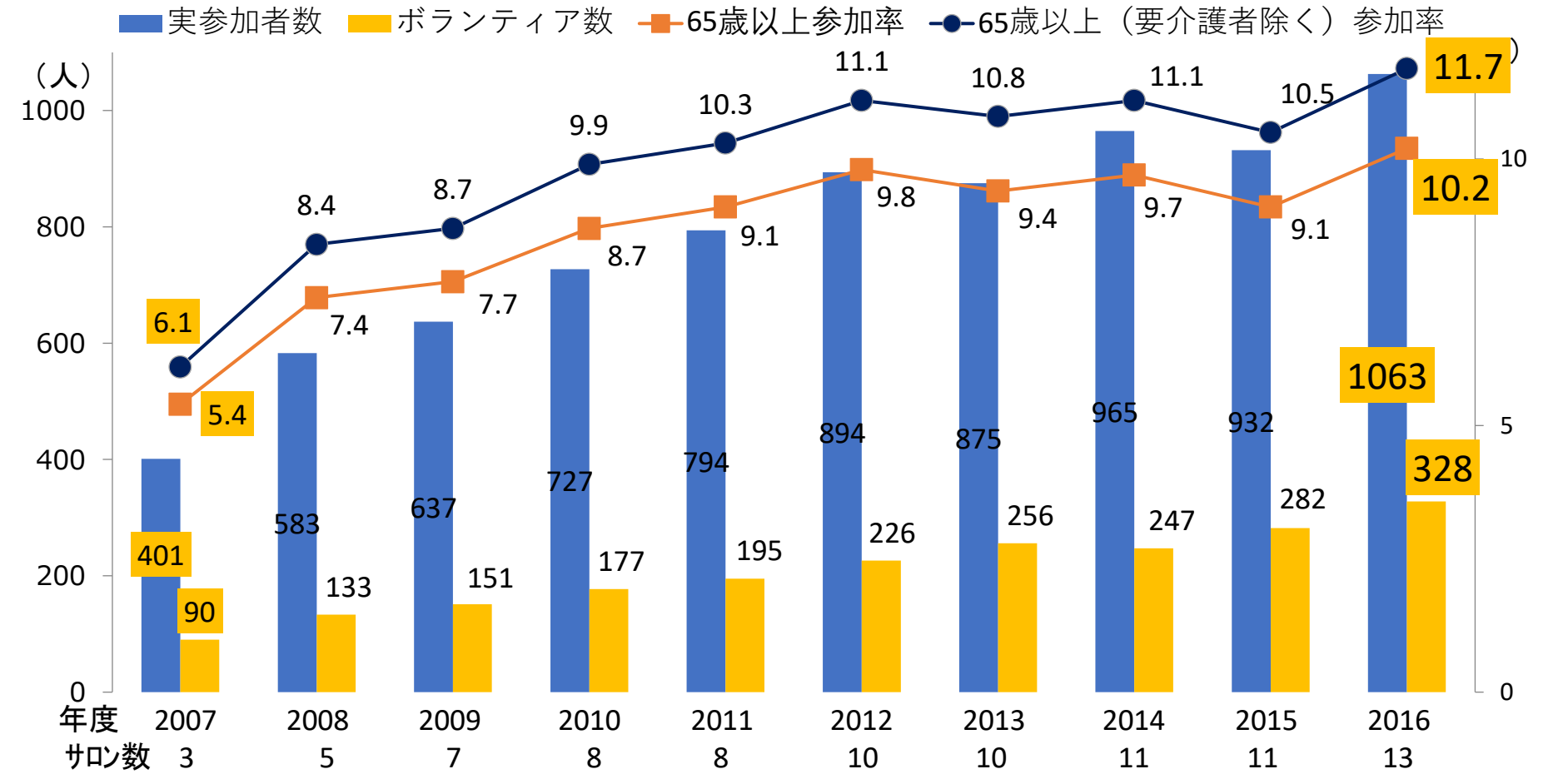
2016



1km（徒歩約15分）圏が着実に拡大



サロン実参加者数/ボランティア数/ 参加率の推移

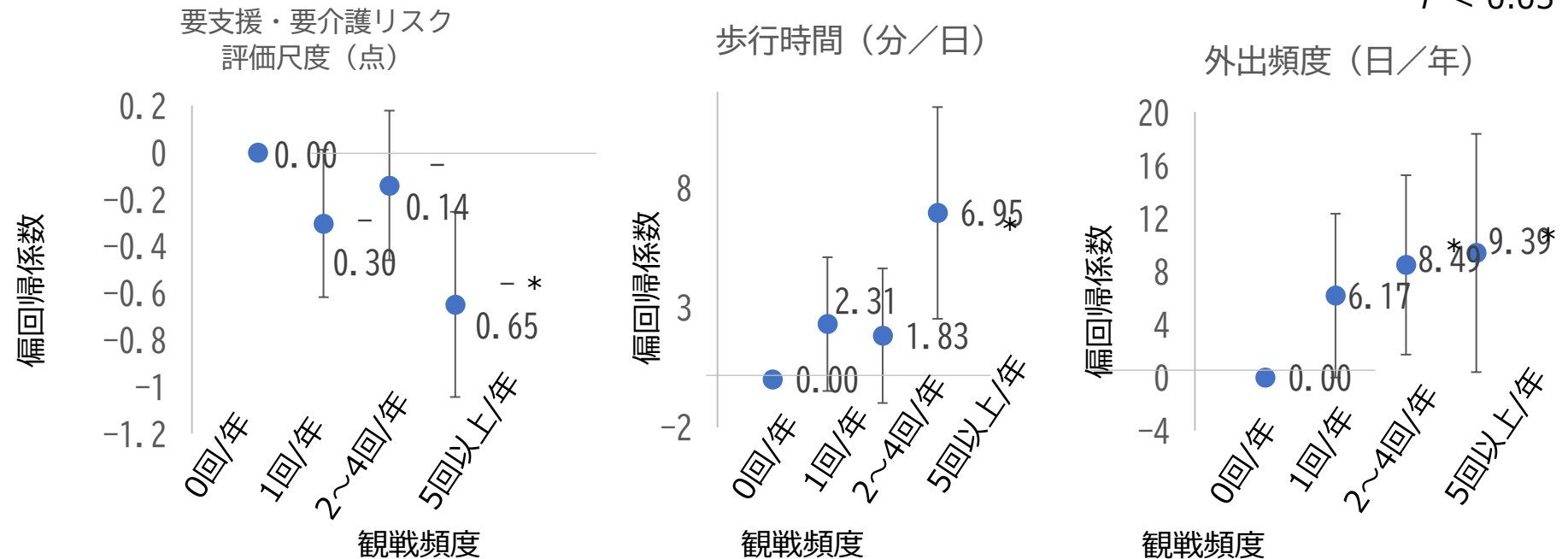


武豊町データより作成
竹田, 2017

他部署も巻き込んだ介護予防への活用：スタジアム・アリーナ

スタジアム・アリーナで観戦している高齢者は
要介護リスクが低く、歩行時間が長く、外出頻度が多い傾向

* $P < 0.05$



分析対象者：9862人（0回：8193人、1回：443人、2~4回：434人、5回以上：322人、

欠損値は多重代入法により補完）

重回帰分析により、偏回帰係数を算出

いずれも性、年齢、婚姻状況、独居か否か、教育歴、暮らしぶり、就労、飲酒、喫煙、BMI、地域ダミーを調整

日本経済研究所. スタジアム・アリーナ等の経済効果・社会的効果の新たな評価手法の開発. 2020年3月

https://www.mext.go.jp/sports/content/20210708-spt_sposeisy-300000763_01.pdf